

(様式第4号)

上田市廃棄物処理審議会 生ごみリサイクル委員会 会議概要

1 審議会名	第4回生ごみリサイクル研究委員会
2 日 時	令和元年11月14日 午後2時00分から4時00分まで
3 会 場	上田クリーンセンター4階 会議室
4 出 席 者	関川久子委員長、吉池卓司副委員長、市川久由委員、太田緑委員、木村芳裕委員、栗田たか子委員、藤原俊六郎委員、宮原尚委員、村田英明委員、
5 市側出席者	山口生活環境部長、峰村資源循環型施設建設推進参事、佐藤資源循環型施設建設関連事業課長、橋詰資源循環型施設建設関連事業係長、土屋廃棄物対策課長、若林廃棄物指導係長、菊地リサイクル推進係長、杉山真田市民サービス課長、佐藤武石市民サービス課長、北島ごみ減量企画室長、鈴木ごみ減量企画係長、尾崎ごみ減量企画係主事
6 公開・非公開	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 ・ <input type="checkbox"/> 一部公開 ・ <input type="checkbox"/> 非公開
7 傍 聴 者	4人 記者 3人
8 会議概要作成年月日	令和元年 11月 19日

協 議 事 項 等

1 開会 (山口生活環境部長)
2 生ごみリサイクル研究委員会委員長あいさつ (関川委員長)
3 議事
(1) 第3回生ごみリサイクル研究委員会協議内容の確認について
・資料に沿い、北島ごみ減量企画室長より説明
・質疑応答なし
(2) 生ごみリサイクル構築に係る検討内容について
①排出・収集の方法
・資料に沿い、鈴木ごみ減量企画係長より説明
・以下、質疑応答
(委 員) 他市の例を見ても、生分解性プラスチックのごみ袋は、時間の経過により劣化するため在庫管理が重要である。また、通常の袋に比べ高価になる傾向があり、その分を各家庭が負担するのか、行政が補助金などで対応するのかなどについて検討しなければならない。一方、バケツでの収集の場合は洗浄の作業が発生し、これについても誰がその手間を負担するのかを考える必要がある。
(委 員) 新しく堆肥化施設を建設するのが難しい状況のなか、現実的には民間施設を利用するか他自治体へ搬出するしかないと思う。そうであれば、受入れ先の処理方法に合わせた収集をすべきではないか。
(委 員) 生ごみの分別収集に対して、市の推計では4割の方が参加するとしている。市が強力なリーダーシップを持って事業を展開し、推計以上の参加者を募っていくことができれば、この事業は上田市の大きなアピールポイントにもなっていく。まずはこの事業を始めることが重要だと思う。
(事務局) 収集に係るコストや手間については排出者にも負担していただくことを考えている。また、収集の方法は処理先によって変わってくるため、優先順位を見極め、着実な方向性を持って事業を進め、仕組みが固まったところで啓発を行い多くの方が参加するように努めたい。

(委員) 平成元年には農協の塩田堆肥センターで米ぬかの堆肥化をモデル的に実施したことがあり、現在では学校給食の残渣などを搬入・処理している。農協側で受入れる体制がとれるのであれば、塩田堆肥センターでの処理が良いのではないか。

(事務局) 農協内部の調整もあり、この場では明確にお答えすることはできない。そのため、収集の方法についても今回の委員会の中で結論付けることは難しいと思う。それぞれの収集方法についてメリット・デメリットなどの把握をするに留めて頂きたい。

(事務局) 今までの活動などを踏まえて、堆肥化施設として想定できそうな場所はあるか。

(委員) 以前、この塩田堆肥センターと協力して堆肥化の事業を進めた際には非常に熱心に取り組んでいただいたこともあり、やはりこのセンターが良いと思う。

(事務局) 塩田の堆肥センターは老朽化や敷地の狭さ、住民からの苦情などの問題がある。

②生成物の利用動向

③機運醸成と実践促進

- ・資料に沿い、鈴木ごみ減量企画係長より説明
- ・以下、質疑応答

(委員) 堆肥化を進めていくうえでは、生成物を「堆肥」とするのか「肥料」とするのかによっても扱いが異なると思う。また、用いる副資材についてもそれぞれの特性や地元で調達可能かなどについて、よく考えなければならない。

(委員) 生ごみによって堆肥化する場合、肥料効果が高いので注意が必要である。A市とB町の堆肥センターがそれぞれ検討事項として挙げられているが、A市のものは「堆肥」であり、成分検査を行い県知事へ届け出をする。一方、B町のものは下水汚泥が含まれているので「肥料」の扱いとなる。「肥料」として扱う場合、重金属など有害物質の含有量の基準などがあり、国の検査を経て登録する必要がある。また、届け出のものと検査時の成分値に違いがあると指導が入るなど厳しい規定が設けられている。

(委員) この2か所について検討するのであれば、どのような方向性を持って進めるべきか。

(委員) それぞれ施設や仕組みについてよく検討する必要がある。A市の場合、2次発酵のための施設を整備し、3か月程度の発酵期間を設けるような仕組みにする必要がある。B町で家畜糞を用いて堆肥化していくのであれば、エネルギーの高い鶏糞や豚糞などを入れることが望ましいが、牛糞で堆肥化を進めていくのであれば生ごみは全体の3分の1程度の量に調整する必要がある。

(委員) どのような方法であっても、誰もが取り組みやすく生ごみの堆肥化に向けた動きが拡大する方向性を探っていかなければならない。

(3) 生ごみリサイクルシステム計画 (たたき台)

- ・資料に沿い、北島ごみ減量企画室長より説明
- ・以下、質疑応答

(委員) 市内の事業所に減量・再資源化に対して積極的に関わるような機運はあるのか。

(事務局) 事業所は生ごみ処理に関して許可業者に任せている部分が多く、今までは資源化ルートが無いためにクリーンセンターで焼却していた。しかし、事業所に対して生ごみの非焼却処理ルートの提案をする許可業者が出てきたことにより、事業所にも分別や資

源化に対する意識が向くようになってきていると思う。

- (委員) 事業系ごみはある程度成分が安定しているので、より積極的に資源化に向かって進んで欲しいと思う。
- (委員) 生産する堆肥は、施設が実際に稼働してから成分などの研究・改善をしていくのか。それとも、既存の堆肥などをサンプリングしてある程度生産する堆肥の方向性を決めた上で施設を稼働させていくのか。
- (事務局) 先行して実施している地域から生産される堆肥のサンプルをいくつか取り寄せ、内容や副資材などの分析をしたいと思う。
- (委員) 家庭ごみの分別収集については仕組みづくりなどに非常に時間がかかると思う。事業系ごみの方が成分として安定しているのであれば、まずは事業所に対して重点的に生ごみ再資源化への取組みを進めた方が良いと思う。
- (事務局) 平成 29 年度には事業系ごみ減量マニュアルを作成し、調査などで店舗に訪問する際などに配布するなどしてごみ減量への啓発を進めている。今後においても、排出した生ごみなどをなるべくクリーンセンターに搬入せず、非焼却処理のルートを紹介することができればと思う。
- (委員) 現在、生ごみ減量化機器の購入費補助金を出しているが、利用者に対する追跡調査は行っているのか。また、生ごみ処理機で出来た乾燥生ごみなどは捨ててしまう利用者は多いのか。
- (事務局) 平成 24 年に行った追跡調査では「長年にわたって機器を使い生ごみ堆肥化に取り組んでいる」という回答が多かった。「やさいまる」などの事業により、乾燥生ごみを燃やせるごみにしないためのフォローをしているが、利用者拡大に至らないことから、可燃ごみとして排出している方は一定数いると思う。
- (委員) 「やさいまる」として持込まれたぱっくんはどこで処理されているのか。
- (事務局) 農協の塩田堆肥センターへ入れているが、量はわずかである。
- (委員) 以前は家庭に庭や土が無く、使い終わったぱっくんの利用先がない人たちは、エコ・ハウスで引き取り信州大学の農場で利用していた。「やさいまる」が始まってからは信州大学へ運び込むことは無くなったが、現在のぱっくん利用者は農家が多く、自分の畑などに入れるので「やさいまる」に持込む人はわずかである。
- (委員) 生ごみ処理機を用いて生ごみを乾燥処理するのであれば臭いなども少なく抵抗も少ないと思う。生ごみ処理機が普及すれば、生ごみの減量に大きな効果が出ると思う。
- (委員) 「やさいまる」に持込むものは処理機による生成物が多いのか。
- (事務局) 次回の研究委員会で回答します。
- (委員) 庭などが無い家庭の場合、生ごみ処理機で出来た乾燥生ごみを肥料として利用できず、結局可燃ごみとして排出されるのではないかとと思う。
- (委員) 長年にわたって生ごみに関する議論が進まなかった経緯がある中、処理施設が決まらない状況で分別の方法などを議論しても意味がないのではないかと。
- (事務局) 自己処理を促す施策が中心であったことや、共同処理を検討する上でも施設の設置場所の選定が困難であったために、今まで議論がなかなか進まなかった。新しいクリーンセンターをよりコンパクトなものにするためにも、地元住民だけの負担とせず、市民一人ひとりがごみの排出に対する責任を持つ必要がある。今回の議論の内容を今後

の計画に活かしていくとともに、何らかの形にして着手していきたい。処理施設については今後の関係団体との話し合いの中で具体的な手法について進めていく。

(委員) 上田市全体で生ごみの減量・再資源化を進めていくような議論が新たに始まったことを広く知ってもらい、今まで関心の無かった人たちに意識を向けてもらうことが重要なのだと思う。

(事務局) 生ごみの減量・再資源化について、自己処理を基本として取り組んでいく機運醸成を図ることが重要である。処理の方法などについては大きな課題であるが、今後、関係機関と実現可能な処理方法や副資材の確保などについて検討を重ねていく。

(委員) 現在の堆肥センターも決して経営が好調であるとは言えないことや、住民から臭気に関する苦情により廃業せざるを得ない施設もあるのが現状である。今後、上田市と十分な話し合いを重ねながら進めて慎重に進めていきたいと考えている。

(委員) この議論が委員会の中だけで終わらせる事がないように、市全体に対する周知啓発ができなければ意味がないと思う。

(9) その他

(委員) 以前の広報の中で真田地区において生ごみ処理の取組みを始めるという記事があったが、その後の経過はどうなっているのか。

(事務局) 大型生ごみ処理機を設置することにより、地区内で生ごみを共同処理するというもの。開始当初に比べてなかなか処理量や利用者の拡大につながっていない。また、大型処理機では「堆肥のもと」が生成されるが、熟成する期間が必要であることから動物に荒らされるといったことも分かった。

4 今後の開催日程について

・資料に沿い、鈴木ごみ減量企画室係長から今後の審議予定について説明。

(委員) 次回で委員会は最終となるが、自己処理への機運醸成に向けた方向性も示して頂きたい。

(事務局) 自己処理の部分についても具体的な方向性を示したい。

5 閉会 (山口生活環境部長)